

0.1 Moore 空間

Definition 0.1.1

π をアーベル群、 n を非負整数とする。 X が (π, n) 型の Moore 空間であるとは、

$$\tilde{H}_m(X) = \begin{cases} \pi & m = n \\ 0 & \text{otherwise} \end{cases}$$

となる空間である。一般に (π, n) 型の Moore 空間を $M(\pi, n)$ とかく。

この定義を見て、すぐに思いつく空間が球面である。

Example 0.1.2

S^n は、 (\mathbf{Z}, n) 型の Moore 空間である。

さて、 $M(\mathbf{Z}, n)$ としては球面があり、加法性定理を用いれば、 $K(\mathbf{Z}$ の直和, $n)$ としては、球面の wedge がとれる。では、一般のアーベル群 π に対して、 $M(\pi, n)$ は構成できるだろうか。

Lemma 0.1.3

任意のアーベル群 π に対し、次の完全列、

$$0 \longrightarrow A \xrightarrow{f} B \xrightarrow{g} \pi \longrightarrow 0$$

が存在し、 A, B は自由アーベル群として取れる。

proof) B を π から生成される自由アーベル群とし、恒等射 $\pi \longrightarrow \pi$ から誘導される準同型を、

$$g : B \longrightarrow \pi$$

とする。 g はつまり、 B での形式和を、 π での和に対応させるものである。 $a \in \pi$ に対し、 $g(1a) = a$ であるので、 g は全射である。また、 $A = \text{Ker}g$ とおけば、これも自由アーベル群であるため、inclusion を f とおけば、

$$0 \longrightarrow A \xrightarrow{f} B \xrightarrow{g} \pi \longrightarrow 0$$

が完全列となる。

Lemma 0.1.4

位相空間 X に対し、 $\text{Hom}(\tilde{H}_n(S^n), \tilde{H}_n(X)) \cong \tilde{H}_n(X)$

proof) $f \in \text{Hom}(\tilde{H}_n(S^n), \tilde{H}_n(X))$ に対し、 $\tilde{H}_n(S^n) \cong \mathbf{Z}$ であるため、生成元 i_n に対し、 $f(i_n) \in \tilde{H}_n(X)$ を対応させるのは同型となる。

Theorem 0.1.5

任意のアーベル群 π と、非負整数 n に対し、 $M(\pi, n)$ が存在する。

proof) Lemma 0.0.3 により、次の完全列、

$$0 \longrightarrow A \xrightarrow{f} B \xrightarrow{g} \pi \longrightarrow 0$$

が存在し、 A, B は自由アーベル群が取れる。 $\{e_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$, $\{d_\omega\}_{\omega \in \Omega}$ を、 A, B の基底とする。これより、

$$A \cong \tilde{H}_n\left(\bigvee_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda^n\right), B \cong \tilde{H}_n\left(\bigvee_{\omega \in \Omega} S_\omega^n\right)$$

となるため、これより上記の完全列は、

$$0 \longrightarrow \tilde{H}_n\left(\bigvee_{\lambda \in \Lambda} S_\lambda^n\right) \xrightarrow{f} \tilde{H}_n\left(\bigvee_{\omega \in \Omega} S_\omega^n\right) \xrightarrow{g} \pi \longrightarrow 0$$

となる。ここで、

$$\Phi : [\vee S_\lambda^n, \vee S_\omega^n] \longrightarrow \text{Hom}(\tilde{H}_n(\vee S_\lambda^n), \tilde{H}_n(\vee S_\omega^n))$$

を、 $f \in [\vee S_\lambda^n, \vee S_\omega^n]$ に対し、 $\Phi(f) = f_*$ とホモロジー群間に誘導される準同型を対応させる。ここで、次の可換図を考える。

$$\begin{array}{ccc}
[\vee S_\lambda^n, \vee S_\omega^n] & \xrightarrow{\Phi} & \text{Hom}(\tilde{H}_n(\vee S_\lambda^n), \tilde{H}_n(\vee S_\omega^n)) \\
\cong \downarrow & & \downarrow \cong \\
\prod_{\lambda \in \Lambda} [S_\lambda^n, \vee S_\omega^n] & \longrightarrow & \prod_{\lambda \in \Lambda} \text{Hom}(\tilde{H}_n(S_\lambda^n), \tilde{H}_n(\vee S_\omega^n)) \\
= \downarrow & & \downarrow \cong \\
\prod_{\lambda \in \Lambda} \pi_n(\vee S_\omega^n) & \xrightarrow{H} & \prod_{\lambda \in \Lambda} \tilde{H}_n(\vee S_\omega^n)
\end{array}$$

最下部の横列の写像は Hurewicz 準同型の直積である。ここで、Hurewicz 定理により H は同型になり、 Φ は全射であることがわかる。よって、

$$\exists h \in [\vee S_\lambda^n, \vee S_\omega^n] \quad s.t. \quad \Phi(h) = f$$

つまり、 $h_* = f$ となるため、 h の写像錐 C_h を考える。 $(C_h, \vee S_\omega^n)$ のホモロジー完全列を用いるが、ここで $\vee S_\omega^n \hookrightarrow C_h$ は cofibration であるため、

$$H_m(C_h, \vee S_\omega^n) \cong \tilde{H}_m(\Sigma \vee S_\lambda^n) \cong \tilde{H}_{m-1}(\vee S_\lambda^n)$$

である。よって、次の完全列がある。

$$\cdots \longrightarrow \tilde{H}_m(\vee S_\lambda^n) \longrightarrow \tilde{H}_m(\vee S_\omega^n) \longrightarrow \tilde{H}_m(C_h) \longrightarrow \tilde{H}_{m-1}(\vee S_\lambda^n) \xrightarrow{h_*} \tilde{H}_{m-1}(\vee S_\omega^n) \longrightarrow \cdots$$

$h_* = f$ は単射であったから、 $m \neq n$ の時は、 $\tilde{H}_m(C_h) = 0$ である。また、 $n = m$ のときは、 $\tilde{H}_{n-1}(\vee S_\lambda^n) = 0$ となるため、完全列より準同型定理を用いて、

$$\tilde{H}_n(C_h) \cong \tilde{H}_n(\vee S_\omega^n) / \tilde{H}_n(\vee S_\lambda^n) \cong B/A \cong \pi$$